（カンバン繪日

富田溪仙）

松本壁の外さんと。繪看板と。私のことを紙屋保然・松本庭の活動映畫を観て追憶したのである。

外さんが、まだ黒の股引と江戸胸當を着けて髭髪がつてゐる時代であるから古い話はちがいない。

川上音次郎がまだ四合巡査の扮装が

脱けないし、豆奴と雖も笑つても散の白粉が乾ぬ羅衣を生ずるといふ怨言はないぶ代で。

大阪の寄屋の陳列に新築の劇場高國館（の？）に於て、オセロの芝居に主京晴らしい人達をまつめてゐる。

『ちがつと此所で変なことを述べる事があるおゝなる筆がして、といふのはこんな下だらぬ話を書く場合は秋蛙

とか私とかマアとか俺とか訛れば硬く
なつたり厳粛の感じがありすぎたり。
ばさけたりする感じがある。こんな
場合に高合する自己名稱にはあたき
といふ筑紫人詐を利用することが
相應しいやうなきがしてならぬ。東京
の婦人魚屋などが使いそうなあちき
などいふ自己名稱などすれもあたきの
方が鈍重ではあるが俗と趣味の御合
がおつぶらに思ふので私も利用してみ
ることにして

漢仙書簡

四

兎も角も。そういふあたきは二十六を
少し出た場でちると思ふ。
そしておはずかしながら觀劇といふものは
この才セにが初めてであり。四合でしか
も坊主臭く育つた。あたきには丁
度支那旅行の際初て香港に上
陸した時と。まあ同じ感激を抱い
たやうに事情してゐる

それ程の言葉の革新とでもいふこと
迄に対峙して。これはまた実に世
の新派俳優に、須藤定憲といふ
いわゆる新派の時代覆れの一派が。
京都の夷谷座で出演してゐた。
忠臣蔵などを強調してゐるが——
なんでも。日清戦争にからむ悲劇
ものである。
ところでどう感ずつたものか。須藤俳
優が国粋会員のような弟子を

漢仙書簡

三人連れて京都一
一間ずつない。あたきの宅に訪れて来
て。須藤が・西安するに……西安するに
を筆でも耳に挟んだようで有つた
その西安するに東谷座の此今度我に
の芝居の為めに。特に繪看板を描
いてくれといふ京都問である。
迄もきのいた、あたき、も又この高名者
をせずにはゐられないことになり。
御存じでは・無論ないであろうが。元来

あたきは若し狩野派からの正統を
踏んで来たものであるが。現今狩野派
に飽きたらず。唐宋元の古畫を研
究しつつある。『當時は四條派と及
至類似の畫風が、今のカフエーのように
流行しておた。ではあるが。狩野を超越
するには確固たる主張の持ち合せなく、
といふて個性を打ち出すには苦行が
足りない。といふて四條派の二番煎
な真似事をするには鈍重でありました。

溪仙書簡

事実は実にたゝない。こんな環境の灯
燈もない。孤島の暗黒に、のりあげ
ておる。あたきに新派の芝居の看板
を描けとは。殺ごろし甚だしい。あんたも
何か曲の取り違いをしたのでは、ない
かと思はしもしたが
やがて須藤の墳墓の背後から幽子の女形
のようなものが、白を出して。甘くこの
狩野派迷人を口説く段取りとなる
とんな利用の頭取になると、女形俳優

は甘いものだと思つたりした、ちたきの戸の理窟などは、何分無知でぶつかしいことはなじませぬといふセリフで、こちらの理窟の蔵口の孔にぐいぐい栓をしては看板を描せるに都合のいい文句を、いくられも知つてゐるように思ふたのあたきも一言も出なくなつて描くことになつた。

ここでそう思うた画かきは白紙を展たときたうと無言であるが御優

漢仙書業

は幕が開いたうとその反對である

そして六枚斗りの繪看板は十余日で出来た。何んとも彼とも。ちたきは出来上がつた満足で。

それでも竹さんは勝力で生きてゐるだけあつて一半分で表裏の壁の表に展い別したのである。

竹さんの家内でこの所謂仕立屋居を看たときの。大胆な感じだ

けは今でも思い浮べることが出来る。

棒鱈や鰊や乾物は古くなつたりしてもさほどにはないが、生魚の新らしき味のそれは古くなりつつ凋落する姿は、はなはだ痛ましく看ておられず

人命百に満たず陸にはけられた魚のように、古くなつたり新らしくなつたりを超越できぬものか

溪仙書簡

むしろ漁夫も心を寄せない藻屑や雑魚たりとも毋は洪流に託すとして、悠々自在でありたいなど、海感した

芝居そのものよりも、この感傷が更に強かつた。やくしやのこの寞寥感のほうが

そして芝居が終ると、例の竹さんが自板の書料金八円也を。うやうや

しく差出した。又うやうやしくあたき
が頂いて。こちらも何も不足もなかつた。